

# 別れとしての死 —岸本英夫の生死観—

小野谷加奈恵

## 序

本論は岸本英夫の生死観の要となる概念、「別れ」をめぐる哲学者の議論を、唯一のエビデンスともいえる残された彼の著述を手がかりに検討するものである。

まじかに迫る死は、それに対峙する人から多くのものを奪い、絶望に陥れようとする。黒色腫という悪性のがんの告知を受け、死の恐怖に直面して悶々とした日々を過ごしていた岸本英夫が、がんのもたらす死の脅威に一応の納まりどころを見つけることができたのは、死は「別れのとき」という考え方方に目覚めてからであった<sup>1)</sup>。しかし、もともと死ぬことは別れていくことであり、「死は別れ」である。傍からみれば同語反復にしか過ぎないこの言葉に彼がなぜ大きな意味を見出すことができたのか。十分に説明しないまま、岸本が逝ってしまったため、多くの論者が「死は別れなり」を起点に、様々な岸本の死生観を語る。「別れ」に関する岸本の言説は何か。

岸本の語る「別れ」には、「絶対的な断絶」、「いやな空虚さ」という形容を与える相良亨氏<sup>2)</sup>の受け取り方がある一方、岸本を来世信者とみて彼の語る「別れ」に一時の別れという程度の意味しか与えない見方もある。来世での再会という期待を言外に含みうる来世信仰を岸本が本当はもっていたのだとする窪寺俊之氏<sup>3)</sup>らがそれである。

相良、窪寺らの岸本論を検討しつつ、岸本の叙述を基盤に拙論を展開する。

## I. 「別れ=断絶」という見方

「別れ」を自己の死生観のキーワードにした岸本を、「別れ」を語る歴史上の人物の一角に置いて、相良は日本人の死生観<sup>4)</sup>を語る。彼は岸本の言う「別れ」を「絶対的な別れ」<sup>5)</sup>、「絶対的な断絶」<sup>6)</sup>、「絶対的別離の孤独」<sup>7)</sup>、「いやな空虚さ」<sup>8)</sup>ととらえているが、岸本の著作と照合する限り、相良の受け止め方の妥当性には疑問が残る。

言うまでもなく別れにはいろいろなものがある。岸本自身がよしとして描く別れは相良が表現する断絶ではない。彼は、「別れ」を次のように述べている。

「死というのは、人間にとて、大きな、全体的な『別れ』なのではないか。そう考えたとき、私は、はじめて、死に対する考え方たが、わかったような気がした」<sup>9)</sup>。

「人間は、長い一生の間には、長く暮らした土地、親しくなった人々と別れなければならない時が、かならず、一度や二度はあるものである。もう、一生会うことはできないと思って、別れなければならないことがある。このような「別れ」、それは、常に、深い別離の悲しみを伴っている。しかし、いよいよ別れのときが来て、心をきめて思いきって別れると、何かしら、ホットした気持ちになることすらある。人生の、折に触れての、別れというのは、人間にとては、そのようなものである。人間は、それに耐えていけるのである。

死というのは、このような別れの、大仕掛けの、徹底したものではないか。死んでゆく人間は、みんなに、すべてのものに、別れをつけなければならない。それは、たしかに、ひどく、悲しいことに違いない。しかし、よく考えてみると、死にのぞんでの別れは、それが、全面的であるということ以外、本来の性質は、時折、人間が、そうした状況におかれ、それに耐えてきたものと、全く異なったものではない。それは、無の経験というような、実質的なものではないのである。

死も、そのつもりで心の準備をすれば、耐えられるのではないだろう

か。・・中略・・

このように心の準備ということに気づいて見ると、ずいぶん、心がおちついてきた。死というものが、今まで、近寄りがたく、おそろしいものに考えられていたのが、絶対的な他者ではなくなってきた。むしろ、親しみやすいもの、それと出逢いうものになってきたのである」<sup>10)</sup>と死を全体的な「別れ」と考えることによって変化した自分の心の動きを記している。留意したいのは、そこで岸本が使っているのは、「絶対的」ではなく「全体的」、「全面的」という表現であったということである。岸本のいう「全面的な別れ」を「絶対的な別れ」と読み込み、「絶対的な断絶」、「絶対的別離の孤独」といういやな空虚さ」という言葉で表現すると、「別れ」という発想で、彼が安寧に至ることはない。

## II. 「別れのときとしての死」

当時の多くの人と同様、岸本もまた、がん告知によって精神の危機に陥った。「別れのときとしての死」の観念は、彼がそんな闘病の過程で手にした、成瀬仁蔵氏の告別講演の講演録<sup>11)</sup>によって大きな展開をみせる。彼は「別れのとき」に特別、特有の意味をこめ、それに思念を集中させて、精神の危機から脱出している。本章ではこうした岸本の思考過程をたどることで、彼の生死観の要となる「別れ」に関する考え方、心の取りまとめの仕方を概観する。

### II-1 「絶望的な暗闇」<sup>12)</sup> の観念からの脱却

米国で、余命半年とのがん告知を受けた岸本英夫は死の恐怖に陥る。宗教学者として長い間、死の問題を客観の立場から考察して来た彼が、黒色腫という悪性のがんの告知を受け、自己が消滅するという、自己自身の生死の現実にはじめて立たされたのである。そして、彼が「生命飢餓状態」と称する「腹の底から突きあげてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない

い状態」<sup>(13)</sup> にある自分を発見する。「生命飢餓状態になった場合には、死との闘いは、もはや単に観念的なものではない。死の恐怖は、人間の生理心理的構造のあらゆる場所に、細胞の一つ一つにまで、しみわたる」<sup>14)</sup>。

岸本によれば、死の問題とは、肉体の苦痛だけではなく死そのものに対する恐れ、即ち、自分というものの意識、「この自分」が消滅するという、問題である。死の恐怖の根源にあるものは、今持っている「この自分」の意識、「この、今、意識している自分」<sup>15)</sup> の消滅である。「今意識している自分というものが消えてなくなると考えることは、身の毛のよだつほど恐ろしいのである」<sup>16)</sup>。

彼が、「この、今、意識している自分」の消滅を恐れるのは、「死後の生」、「この自分」というものの意識の存続を信じられないからであり、死はただ「真黒の暗闇」、「絶望的な暗闇」となっていたからである。しかし、「死を実体と考えるのは人間の錯覚である。死というものは、そのものが実体ではなくて、実体である生命がない場所であるということだけである」<sup>17)</sup>、「生と死とは、ちょうど、光と闇との関係にある。物理的な自然現象としての暗闇というのは、それ自体が存在するのではない。光がないというだけのことである」<sup>18)</sup> ことに気づき、「人間に実際に与えられているものは、現実の生命だけだということである」<sup>19)</sup> という発見に至った岸本は、「人間に実際に与えられているものは、現実の生命だけ」であることを見据えて、実体である生命をどう生きるか、どうよく生きるか、ということに関心を移行させていくのである。

## II-2 成瀬仁蔵との出会い

岸本の生死観のもう一つのポイントは「別れのときとしての死」の観念が特別の意味をもって再び彼の中に登場してきたことである。岸本は、「生死観四態」<sup>20)</sup> という罹病前の著作の中で、死後の生命を信ずる人たちのあり方にふれ、「死を超えた大きな拡がりをもった生死観が生まれて来ると、死の意味が変わってくる。死は、肉体的な命の終わりではあっても、その後には無限の靈的生命がつづいている。単なる生命の終わりではない。親しきも

の死も、永遠の別離ではない。やがて、彼の世で期すべき再会の日までの、しばしの別れに過ぎない」<sup>21)</sup>と、学者として死と別れについての客観的な論述をしてはいたが、がんの宣告を受けて生命飢餓感にさいなまれる当事者として死の前に立ったとき、暗闇に目を凝らし、自分が無くなってしまう恐怖に逡巡する自分の姿に気づく。そしてこの地上の生命のみ実在する、そう心に決めて対応を考えるに至るが、これに前後して死を前にした成瀬氏の講演録を読んで、「死」に対する彼の考え方の目が開かれたという<sup>22)</sup>。「死」というものは「別れのとき」であり、その大きな、全体的な「別れ」にいかに処するか、という思いがその時から岸本をしっかりととらえはじめる。

しかし、岸本の成瀬に対するとらえ方には岸本の思い入れも強い。この告別講演会で成瀬氏は「私にとりまして死は極自然の日常生活であります。故に死は私にとっては怖れでもありません」<sup>23)</sup>と死の恐れ等は一切語らず、「これは私の本当の身体ではない、直ちに脱ぎ捨てて终う衣服である。私の本当の身体というのはこの中にある靈体である。而して此の靈体は私の品格であります。即ち私の肉体は茲に朽ちるが私が六十年かかって畢生の努力を以って築き上げた私の靈体即ち品格は、靈の宮は永久に亡びないのであります。我々の生命には死滅ということはない、消滅ということはないと私は確信します。故に何の怖れがあるのでしょうか、又、なんの悲しむことがありましょうか」<sup>24)</sup>と自己の信仰、生死觀を明快に語り、「今日の会は今から8年前 一大正元年— に私が 欧米を漫遊するについて皆さんと送別会を開いて、そうして留守中のことを皆さんにお願いいたしましたが、今の私の気持ちはその時の心持と同じことで‥」<sup>25)</sup>と健康であった頃の送別会を引き合いに出しながら、淡々と後事を託して別れの言葉を述べている。

この講演録のどこをみても、死を恐れている成瀬の姿を認めることができないのだが、なぜか岸本は、「これを話されたその刹那にも、成瀬先生の心には死の恐怖がたけり狂い、先生はそれに鬪い、うち勝っていられたのである」<sup>26)</sup>との説明を加えている。

そしてまた、「成瀬先生も、心を支えるものを探されたと思うが、そのときの先生の最後の心の支えとなったものは、女子教育の仕事であり、この女

子大学であったと思う。・・中略・・自分の永遠の生命は、仕事によっていつまでも続く。ほんやりと死を待つのであれば、気も狂うであろうが、病苦にさいなまれつつ、一刻一秒ときざまれてゆく生命の残された時を、あくまで仕事に打ち込もうとする気迫が、真の命、永遠の光をあざやかに先生に見出させたのだと私は思う」<sup>27)</sup> と成瀬の心のうちをとらえ、仕事（女子教育）に対する信念の徹底から「成瀬先生は人間の本当の幸福をめざす仕事のために、身を捧げ尽くしたかた、その捧げ尽くしたことにより自分の永遠の生命を見出したかた、またそれが先生の生涯であり、それが先生の宗教観であったと思う」<sup>28)</sup> と成瀬の宗教観を語る。

いうなれば、岸本は、成瀬の淡々とした態度の根本に、成瀬の信じた来世観をみるのではなく、この世で従事した仕事の価値や人々の幸福のために専心する成瀬の姿に命の永続性、永遠性をみていたのである<sup>29)</sup>。

後に岸本は、NHKラジオの「人生読本」<sup>30)</sup> のなかで「人間にとては、きわめて身近にある自分の仕事の中に、意味を発見して、それに打ち込んでゆくことに、人生の本当の幸福がある、ということあります。死に直面しながら、死後の生命というものをたよりにしない私にとっての、人間の問題の解決の鍵は、このようなところにあるのであります。これが、私の宗教であり、これが、私が、毎日、生きてゆこうとしている気持ちであります」<sup>31)</sup> と語っている。

成瀬には来世に繋がるこの世が有り、岸本はこの世が唯一である。岸本の成瀬解釈は、死後の世界を信じず、肉体を離れた靈魂の存在を信じない岸本が、「立派な別れをした成瀬先生」の生死観、人生観を引き寄せ、引き込みながら自己の生死観を練り上げた一つのプロセスを映し出したものとみてとることもできよう。

## II-3 生存の意味とインテグレーション (integration)

岸本の考え方によれば、この、人々の幸福のため、具体的にはそれぞれに与えられた仕事や役割に専心することに、生の意味がある。彼にとって大切なのは命をささげる、あるいは、命を捨てることの出来る目標と結びついた

生、生き甲斐のある生を送ることである。生き甲斐のある生は「使命としての仕事」と結びつく。彼のいう仕事という言葉は「めいめいの人間が自分に与えられたのは、これだ、と考えるような意味での仕事」<sup>32)</sup>であり、それは、「人間の本当の幸福につながるもの」、「すべての人間の幸福を含んでいる、ひろいもの」である<sup>33)</sup>。それは何も難しいものではない。靴職人が、その靴をはく人の幸福を心に描きながら、一生懸命に靴を作るのであれば、それも又、人々の幸福に繋がっているところの、自分を打ち込むに値する立派な仕事になるというように、極めて身近にある自分の仕事の中に、意味を発見して、それに打ち込んでゆくことに、人生の本当の幸福があるのだと岸本はいう<sup>34)</sup>。

それぞれに与えられた仕事や役割に専心することに生の意味を見出し、その意味に対して自己を集約する。親しきもの、なじみのあるものとの絆に思いを致し、心を取りまとめる。これが岸本のインテグレーションである。

#### II-4 「別れのときとしての死」の観念

岸本は、人々の幸福のために専心する生き方に自己の存在の意味を認め、その意味へと自己をインテグレートする。幸福のために専心し、他者との連帯のうちに生きるものにとって、別れは一般にその関係性の中で培われた意識の確認を伴うものである。たとえ悲しみを伴うものであれ、交わした言葉の一言一言に、あるいはなじみのある行動の一つ一つに自己の存在の意味を求めつつ、別れの悲しみに耐え、別れを了解していく。これは連帯の豊かさを確認しつつ耐えるという手順をふんでいくわけであるから、他者とつながりをもたない人にとっては、もとよりありえない別れの仕方である。

こうして岸本は、死は日々起きている小さな別れの大仕掛けのもの、全面的なものにすぎず、個々の別れと同様、別離の悲しみを伴うものではあるが、連帯の豊かさの充溢裡に別れる悲しみを耐え、別れのときとしての死を受け止めることが可能であるとの観念に至る。

連帯のうちにある関係性の絆に、断絶、喪失と空虚に抗う連続的、永続的なものを見出している死にゆく者にとって、死別は絶対の断絶、全くの孤独、

空虚ではなくなる。それがまさに岸本の目が開かれた「別れのときとしての死」であった。

ところで、悪性黒色腫による大手術を経験した彼が、再発をみるまでの間に書いた短文の中に死に対する恐怖、生に対する執着について次のような件がある。

生涯の努力を打ち込んだ仕事や、熱情を注いだ理想を持つ人は、絶望せずに死んでゆくことができる。その仕事や理想が社会的自我の構成要素である。自我の一部が、いつまでもこの世に残ることを確信しているから、そこに光明を見出して、死ねるのである。

深い愛情で結ばれた人たちによって看取られると死ぬことが容易になる。最愛の妻子は当人にとっては物質的自我の一部である。その自我の一部が、その人達の姿として、自分の後も続いてゆくからである<sup>35)</sup>。

これを書いた時期は病状が安定していた時期であり、W・ジェームズを使いながら比較的客観的に、宗教から離れた現代人の死の対峙の仕方について述べているが、このときに書かれた自分の生命の存続についての一考は、再発によって死の恐怖にさらされ、悶々とした日々を送った末にたどり着いた、“この世の中で親密な連帯があり、仕事であれ、家族であれ、それらとのかかわりにおいて自己の集約（インテグレート）ができれば、そこに、ある種の永続、永遠性に参与する自己を見出し、死を前にした自己の存在の意味を見出すに至る”との岸本の思いに見事に一致する。これが、あの世をもたない岸本が行きつ戻りつして獲得した彼の生死観である。

## II-5 死と修練

行く手のわからない別れの、行く手を見定めようと目を凝らし、死の恐怖から逃れようと、がむしゃらに仕事をこなしていた岸本は、日々の生活をよく生きるという日常に加えて、死を「別れのとき」と見ることによって、別れのための心の準備をする生活を目指すことができた。死という未知なるも

のへの不安は、過去の小さな「別れ」の経験を思い起こすことをとおして、未知なるものから既知へと変わり、恐れていた死は全く知らないものではなかったことに気づく。死を大きな「別れ」の時とみれば、日常の別れのように、だんだんに気持ちが準備されて「いよいよの別れの悲しい刹那も乗り越えることができる」<sup>36)</sup>のである。そして「死を別れのときと見るならば、日常生活の別れの場合にも人々がそうするように、心の準備をしておく必要がある。平生のその時その時の経験を、これが最後のものであるかも知れないという気持ちで、よく噛みしめておかなければならない。そのようにして、十分に心を納得させておけば、最後の死の別れが来ても、人間はその悲痛に耐えることができる。死を別れと見るということは、毎日々々、心の中で別れの準備をしておくということである」<sup>37)</sup>。いいかえれば、耐えるにはそれなりの修練が必要なのである。

以下は岸本の語りの抜粋<sup>38)</sup>である。

①激しく、本当に生きるということ。

「残された生命を、いっぱいの力で發揮すること以外に、死を乗り越えられないと私は感じた。もっと人間が練れていれば、禅僧のように静かに死を待てるのかもしれないが、凡人の私には、激しい生きる力が、死の恐れを乗り越える原動力であった」。

②死後の生活は考えないこと。

「死後の生活は、無意識であって、考えること自体が無駄である。死んでいくまでの生を考えよう。死は一つの別れであるから、死ぬということは、これからどういうふうに別れようかということに代えられる。毎日が別れだと思って、少しづつ別れていくことである」。

③無我の愛に思い到ること。

「自分の死後は自分の生活ではない。そうすれば愛といい、善といい、おのれを没却した無我の愛というようなものが自分にかえってくるように、私には感じられた」。

また、よく生きることとの関連で「こうしてよく生きる生活を深めてゆくと、めいめいにとって、自分自身よりも、もっと大切なものが出てくる」<sup>39)</sup>、「理想を追求する生活の中に、自分の生命よりも、もっと大切なものができている。それは、自分の生命を超えたものである。それゆえ、それは自分の死と一緒になくなる性格のものではない。それは死も冒しえないものである。人間のこのはげしいたたかいの場において、それが、もっとも力強い自分の心の支えになる。そのように、よく生きることを、私は、生死の問題の解決の大切な方法と考えるのである」<sup>40)</sup>とも述べている。

死にゆく人は、人々との連帯の関係性の中に思いを託し、自己をその縊に集約することの努力の反復によって別れに対応する。死の別れのための修練の意味がこれである。

### III. 岸本の来世観

岸本の生死観を語るにあたって、“岸本は、結局来世を信じた。だから安心できたのだ”と評する人がいる。

宮家準氏は、NHKのテレビ放送<sup>41)</sup>の岸本の語りを次のような形で引用している。「死というのは、人間にとって大きな全体的な『別れ』なのではないか。そう考えた時に私ははじめて死に対する考え方方がわかるような気がした。——中略——死とはこの世に別れをつげるときと考える場合にはもちろんこの世は存在する。すでに別れをつげた自分が宇宙の靈にかえって永遠の休息に入るだけである」<sup>42)</sup>。そして、「これが死の淵にたった一人の宗教学者が苦悩の末に自分で編み出した死生観なのである」と述べている<sup>43)</sup>。また宮家氏は「ここで興味をひくことは、実体があるのは唯この世の生だけだと強く確信していた合理主義者の彼が、死の怖れがもたらした信念のぐらつきのなかで、宇宙の靈に帰って休息するという独自の他界観を案出していることである。このことは死に直面した人間にとって他界の存在を信じることがいかに大きな安らぎを与えるかということを示しているとも思えるのである」<sup>44)</sup>と語る。

しかし、宮家氏が引用した岸本の「死というのは、人間にとって大きな全般的な『別れ』なのではないか。そう考えたときに、私は、はじめて、死に対する考え方たが、わかったような気がした」の文章の次には、「死への心の準備」という小見出しで、通常の日々の別離と死別の類似性、死は絶対的な他者ではないこと、準備をすれば耐えうること、日々の修練の大切さがつづられているのである<sup>45)</sup>。また、それにつづく「死の別れの意味」のところには、「死後のこととはしらず、この人間生活だけが生活なのだという立場を徹底して考える」<sup>46)</sup>という自らの立場が語られている。こうした数十行にわたる大幅な省略の後ようやく宮家氏が引用する「中略」以降の「死とはこの世に別れをつげるときと考える場合には、もちろんこの世は存在する。すでに別れをつけた自分が宇宙の靈にかえって永遠の休息に入るだけである」という文章が出てくるのである。宮家氏が「－中略－」という表現を用いて肝要な部分を消去した形で岸本の文章を引用していることに私たちは特別の注意を払わなければなるまい。

宮家準氏は、岸本の文章の一部分だけを取り出して岸本の他界観を述べたことになる。したがってここでは、岸本について同趣旨の発言をしている窟寺氏の考え方方に焦点を当てて検討する。

窟寺俊之氏は、宮家氏が取り上げた、宇宙の靈の引用箇所に加えて、岸本がNHKラジオの「人生読本」で語った「私の心の宗教」から「どうして、自分という個人的な意識が残りうるか。死に直面した場合では、人間の強い生存欲や激しい恐怖感が、人間の心を駆り立てるので、その本人としても、どうかして、死んだあとも、この自分というものは、生きていたいと考えるのはもっともありますが、しかしどうして、それが、近代人に信じられるか、という問題であります。私には、それは、納得しては、信じられないであります。私にとっては、私の個人の生命力というものは、私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまってゆくと考えるぐらいが、せい一杯であります」<sup>47)</sup>という部分を引用して、「(岸本英夫は)肉体的存在の消滅を認めながら、靈の存在の継続を信じることで自己を安心させようとしたのである。その願望を満たすために宇宙の靈や宇宙の生命が考え出されたと

いえよう」と述べている<sup>48)</sup>。

また窪寺氏は岸本が昭和36年にNHKテレビで語った「別れのとき」から前出の文を引用して、「ここには岸本の死生観として死後の世界の存在が語られている。・・岸本は『宇宙の靈に還って』と述べているから、昔、存在した場を想定しているようである。戻る場があることをイメージし、期待していたようである」<sup>49)</sup>と岸本の心的世界を推測している。そして「死後の世界に『永遠の休息』が待っていて、自分を迎えてくれるという安心、安らぎが描かれている。これは宗教が今まで語り続けてきたものであるが、既存の宗教を否定した岸本は、自分の中にそれを作り出してイメージしたのである。このイメージは主観的で客觀性も科学性もない。しかし、それが岸本を支えたことは事実である」<sup>50)</sup>と語る。

確かに岸本には、窪寺氏らが引用した文章のように「宇宙の靈」に帰るといった表現もみられるが、岸本は「別れのとき」のテレビ放送の翌年、今度はラジオ放送の中で「人間にとては、きわめて身近にある自分の仕事の中に、意味を発見して、それに打ち込んでゆくことに、人生の本当の幸福がある、ということあります。死に直面しながら、死後の生命というものをたよりにしない私にとっての、人間の問題の解決の鍵は、このようなところにあるのであります。これが、私の宗教であり、これが、私が、毎日、生きてゆこうとする気持ちであります」<sup>51)</sup>と自分の心情をはっきりと語っている。また前出の岸本の原文を読むと、窪寺氏が引用した「私の心の宗教」の引用部分「私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、溶け込んでしまってゆくと考えるぐらいがせい一杯であります。」の文章の後には「それは、いいかえれば、私という個人は、死とともになくなる、ということであります」<sup>52)</sup>という文章が続いている。そして次の「打ち込んで生きる」という文章の中でも岸本は、「自分にとっては、死後の生命という考え方たは、まったく、たのもに足りないこととしか、私には、考えられないであります」と書いている<sup>53)</sup>。岸本の「自由宗教とは何か」のエッセイにも「私は既成宗教のおとぎ話は信じていない」<sup>54)</sup>という箇所があり、彼の著作を丹念に読むと、同様の記述がいたるところにあるのがわかる<sup>55)</sup>。

窟寺氏は、岸本の内心の出来事について「・・想定しているようである」、「・・期待しているようである」という表現を用いて語り、「それが岸本を支えたことは事実である」と結んでいるが、他者が容易には知りえないものについて断定するのには注意が必要である。特に行為とその背景にある人生観、宗教観に関しては慎重を要する。これは解釈の域を逸脱しているのではないか。

#### IV. まとめにかえて

岸本の別れ観を、彼の著作をとおして、丹念にみていくと次のようなことがわかる。

1. 岸本は、来世を感じていなかった。彼は、死は別れのとき、と説いたが、それはしばしの別れという暫定的なことを意味する来世信仰者のものではない。
2. 「死は別れのとき」の言説は、この世のみ実在する、という合理主義者の言説である。
3. この世のみ実在する、とした岸本は、いかによく生きるかということこそ大事なことであり、人々の幸福のために専心する生き方に自己の存在の意味を認め、その意味へと自己をインテグレートしていく。
4. 人々の幸福のために専心する者にとって、別れは、人とのつながり、連帯の意識の確認を伴う。
5. 一般的な個々の別れと死の別れの違いはそれが全面的であるかどうかということであり、別れそれ自体は未知なるものではない。
6. したがって死という未知なるものに対する不安は、時々の別れの大掛かりなものと考えることによって、死の別れを日々の別れにひきつけ、その繰り返しの中で死をなじませていくことが可能である。

以上が、差し迫る自らの死を前に、思考を集中し、実践して得た岸本の

「死は別れのとき」の言説である。

## 註

- 1) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』講談社、1973、pp.30－34.
- 2) 相良亨『日本人の死生観』ペリカン社、1984.
- 3) 離寺俊之『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、2004、pp.48－52.
- 4) 相良亨、前掲書、pp.172－183.
- 5) 同上、p.174.
- 6) 同上、p.177.
- 7) 同上、p.179.
- 8) 同上、p.176.
- 9) 岸本英夫、前掲書、p.30、傍点は筆者による。
- 10) 同上、pp.30－32、傍点は筆者による。
- 11) 成瀬仁蔵、『成瀬仁蔵著作集 第三巻』、日本女子大学、1981.
- 12) 岸本英夫、前掲書、p.21.
- 13) 同上、p.11.
- 14) 同上、p.14.
- 15) 同上、p.17.
- 16) 岸本英夫、『岸本英夫集 第六巻』、渓声社、1976、pp.130－131、論文初出昭和35年。
- 17) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』p.21.
- 18) 同上、p.21.
- 19) 同上、p.22.
- 20) 岸本英夫「生死観四態」「死を見つめる心 ガンとたたかった十年間」講談社、1973、pp.99-119、初出は「生死観の類型—生死観四態」「大法輪」第15巻第10号、1948.
- 21) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』p.107.
- 22) 同上、p.29.  
岸本英夫「成瀬先生の宗教観」『岸本英夫集 第六巻』、pp.121-127、論文初出昭和35年。
- 23) 成瀬仁蔵、前掲書、p.994.
- 24) 同上、p.994.

- 25) 同上、p.995.
- 26) 岸本英夫「成瀬先生の宗教観」『岸本英夫集 第六巻』、p.123.
- 27) 同上、pp.124－125、傍点は筆者による。
- 28) 同上、p.126.
- 29) それは読み方としてはかなり強引というべきで、この間の事情に関して  
武田修志氏も「多少強引な理解のしかただと/orてよいだろう」（武田修志  
『人生の価値を考える－極限状況における人間』、講談社、p.73）と評してい  
る。
- 30) 昭和37年7月12日から3日間、NHK ラジオ「人生読本」で私の心の宗教と  
題して放送された。
- 31) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』 p.47.
- 32) 同上、p.44.
- 33) 同上、pp.44－45.
- 34) 同上、pp.43－45.
- 35) 岸本英夫「死・人間・文化」『岸本英夫集 第六巻』、pp.266－267.  
論文初出 昭和31年。
- 36) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』 p.87.
- 37) 同上、p.88.
- 38) 岸本英夫「自由宗教とは何か」『岸本英夫集 第六巻』 pp.24－25.  
論文初出 昭和37年。
- 39) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』 p.148.
- 40) 同上、p.148.
- 41) 昭和36年7月16日に「別れのとき－死に出逢う心構え－」と題して、NHK  
のテレビで放送。
- 42) 宮家準『生活の中の宗教』 NHKブックス、1980、p.16. 下線は筆者によ  
る。
- 43) 同上、p.16.
- 44) 同上、p.17.
- 45) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』 pp.30－32.
- 46) 同上、p.32.
- 47) 同上、p.38.
- 48) 窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、2004、p.52.
- 49) 同上、p.51.
- 50) 同上、p.51.
- 51) 岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』 p.47.

- 52) 同上、p.38.したがって「私にとっては、個人の生命力というのは、私の死後は大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまってゆくと考えるぐらいが、せい一杯であります」と書いてある箇所は、せいぜいレトリックの域を出ない表現であるとみるべきだろう。
- 53) 同上、p.39.
- 54) 岸本英夫「自由宗教とは何か」『岸本英夫集 第六巻』p.24.
- 55) 岸本英夫「死についての思い」『岸本英夫集 第六巻』p.129.  
岸本英夫「死を見つめて生きる」『岸本英夫集 第六巻』p.155.  
岸本英夫「わが生死観」『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』p.20.

(おのたに・かなえ 杏林大学保健学部看護学科教授)

---

# The concept of death as Parting: Hideo Kishimoto's life-death view

Kanae Onotani

---

The purpose of this paper is to attempt to analyze and understand Hideo Kishimoto's life-death view, criticizing some interpretations of the concept of death as Parting, the key concept of his life-death view. The interpretations to be criticized here are those of Tohru Sagara and Toshiyuki Kubotera. Kishimoto's Parting was regarded as an absolute severing, solitude, or unpleasant void by Sagara. A different view, which will inevitably lead to regarding parting as a momentary one, was taken by Kubotera. Kishimoto, a modern rationalist, was considered to have had a belief in eternal life after death.

According to Kishimoto, people who work for and devote their energy to the happiness of everyone will find the meaning of their lives in the work for that happiness. Partings which sometimes happen among the living people are a chance to be reminded of the sense of solidarity among the people who endeavor to promote their happiness. The plenitude of the sense of solidarity is, however, not to be given to the isolated egoists. Death is an overall parting, which is different from other partings only because it is overall. Death, though it is painful, is also a chance to be reminded of the sense of solidarity. It therefore is not convincing to regard death as an absolute severing, solitude, or unpleasant void, because the sense of solidarity works against solitude or a sense of void.

Careful investigations of Kishimoto's writings will also refute Kubotera's understanding as a mistake on the grounds that his understanding is inconsistent with Kishimoto's whole writings, though Kishimoto used such words as the life or spirit of the universe which makes us associate with the afterlife. It will be shown that these usages should be taken only as

rhetorical. He rejected the irrational idea of an afterlife.

Kishimoto integrated his life into the eternal significance of intimate solidarity among the people in this world and tried to cope with his death, comparing his own death to the long term partings in this world between intimate friends.